HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮民俗採集
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1943-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77334
Type	manuscript
Note	昭和 18年 8月起、ノート、 20頁。
File Information	D006_01188.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

NOTE BOOK

朝鮮民俗採集

昭和十八年八月起

鈴木榮太郎

男女の別と長幼の序

女は男と口を利く事を不良とされて居る。八九才の女の子に道を尋ねても返事しないのが田舎では普通である。然し一人前の婦人は男には口を利かぬ。異性に対しては極めて無愛嬌なのが善良とされて居る。大体百姓家の女の子などは中以上の家庭へは出さぬ。女の職業としては女教員位が一寸よい職業とされて居る。女は男の前に出ぬのみならず、働くのを蔑視して居る。異性の前では絶対に肌を出さぬ。高山が郡の附近の村の中で水泳して居た、野良に居た百姓二人が来て、女が居るのに水泳して肌を出すとは何事かと怒鳴りつけて帰えさうである。半島の婦人が他地の海浜に行って三四日を立て色を変へたりとか言ひ合ふ。

玄界灘で海に半島の男が、夜おそく一人で泳いで居ると他地の女が直ぐ来たので色を失ってしどろもどろになって居る。

近頃石の話では乱れ男女が共に入浴しなければ、生れ丈で村を追ひ出される様である。家庭内に於ても他人の前でも男は肌を出さぬ。兄妹でも七八才以上に成れば終って居る。

夫婦間でなく常座に於ても皆終って居る。

歌は女は人前では強く絶対に歌はぬ。

家庭内で夫婦が共に食事する事はない。他人と食事する事は夫は一緒に食はぬ。

長幼の序については、他人でも五才の上は兄、十才の上は兄父に準ずるとして扱ふ。

部落では年若き者は指揮される。地方では老人はどんな貧しい地位の後ろに居ても若い者に対しては目下に対する言葉を用ひる。

未婚者は村に絶無である。

伝事に対しては目下に対する言葉を用ひる。未婚者は村に絶無である。

伝事に対しては目下に対する言葉を用ひる。未婚者は村に絶無である。

父子は別に相談する事はなく、立って居る。父子は出する事なく、立って居る。父又は長老の前で酒タバコを用ひる事なし。父子食を共にする事なし。

飯岡、未婚男女の風紀、和歌山、地方の貧男婦。

野良で働く男女はどんなに暑くても、肌を出すことはない。男女共の場合は様が、女が居れば肌は出さぬ。女が野良に出ぬ様になった理由の一つでもあろう。

○労働の慣習

大抵五十以上は常に何でも働かぬ。子供に任せる。老人で働くのは子供が無い者である。嫁が来れば主婦も隠居する丈で自分は働かぬ。少し金があれば召使いを何人も置く。田舎で五万円も持って居れば召使四五人は使って居る。

労働しない両班や常民の老人や婦人達は祖先祭や誕生日の祝（や名節）の行事などを行ふ。これが彼等の仕事である。

紳苑女学の出身者は大抵妾になるといふ。働かないでよいからです。女学校に出すのは、その娘が婦になった時働かなくてよいからです。女学校を出て居るのは働かず様な事はしないと考へて居る。内地人の指導地位の人が女中なしで主婦が働くのを不思議に思って居る。朝鮮では下女下男が多い。

○ 他人と親的関係

家族中のたゞ独なって一家がガランとして居ます様な事は絶対に有る。

親類の家庭では祝生祭の外に家族一人くの誕生日の祝が招待盛大に行はれる。夕飯迄を作り饗を造る。祭りは何もない。

親類の家々は夫婦の祝か二祝或らは三祝しるか、常食でも夫婦一祝毎に連物(チエ)が加はる。同じ居部屋には子が勉強してる。然しその夫婦は会話などは出来ない。男世代よりも女世代に多く又大に別れ居る。

誕生日は男女共に祝ふ。ご飯を山もりにして在人に食はす。茶めの計も出す。常食(昼)家でも知り。親の時は飲物は出さず、中食夕食は大体普通。時にソーメンを用ふる。三食共ごちそうする。

親子は共。父や祝父の誕生祝には村の人々を招く。子供の誕生祝はそれ程盛大にはせぬ。誕生祝は親者仲の祝はれの一般で父や母等の誕生日を祝ってやるのです。招待客は父母からこゝは場合も多い。しないでもよいと思ふ。場合もよくある。それの最盛大なのが軍人の祝です。招くのは同族近隣老人等を招く。

父母が死人で三年目人の内に其の軍人の弟が帰ると盛大に祝ってやる。

家族全員の紹介、　全家族全員の様子、親分の生活

○

物数の区分

物質の問題は内度一応で、之れに属するもの即ち「ポワー」が多い。内度が多に一応を地せば、「ポワー」が加はる。多に一応が其は中度（メゾン）が加はる。

総べて人が住まうが内度です。家のこと（物数）は内度と外度（パカパン）（住所と国柄）の二部よりなる。更に之れは外度はなこと。外度は男子の身心、底稼ぎです。内度と外度は様々異にする。内度の一様をアンテリエ（内度の重物）と申シテエ（住所の国物）に分ける。

内度外度の外に召使の住居が大に様なる意がある事がある。

移動の一応が内度にあるもの。然るに其家族に同じ。大多数の家族とは。廊下とかよりもサンルームの様な所を設ける事にマンションがある。

之の様に内地の文明に相当するものにアパートとかがある。

応は本社の様なのです。仏蘭西。ロシヤ。内地は国柄。

住居が強き人者に比べ。日本の住居は弱者です。

○独居人

年期奉公人――インクム、大抵一年期一冬又は春の新作の時から秋の収穫迄。

三十四才の独身者、家を持たぬ。貧農の子又は外来者。

村の書記宿（ガヨン）に泊る。両親はインクムは自宅に帰泊せしめぬ。

書記宿は学長の家のガヨン式の教育家族の家。宮沢氏はやうぬ。書記宿の学長は自身でインクムを村さとホをサヨンに泊らして行るのに村の他のインクムの心を二に一致させて寝るとさよ見て居る。親は行かない。

インクムは食事は戸主人の家で食べる。

一年働いて以前は五十円、今は百三十乃至五十円。

雨の日やとは書記宿にまへこちかく働くは主人の家に行って食べる。自宅に帰って食べる。

家族は行かぬ。自分の家には夕食はわにて行くなります。

甲の家に一年居ればこの家にとさよ見て行く。同一の主人の家に何年もつとめるのは余りない。

老年まで独身の者もよくある。

五十戸の部落に五人位の独身者（二十以上の）は五六人は居る。五十戸の両親は一二戸。

主人は春と夏に明を一番つゝ雇る。一年に二三番やるか何でも。後院に主人の家でやる。学長の主人は自宅にとめる。

大きな農家にはインクムが二三人居る。妻帯者のインクム

伝みの四男――チョング Chong は四男は弱とせず。

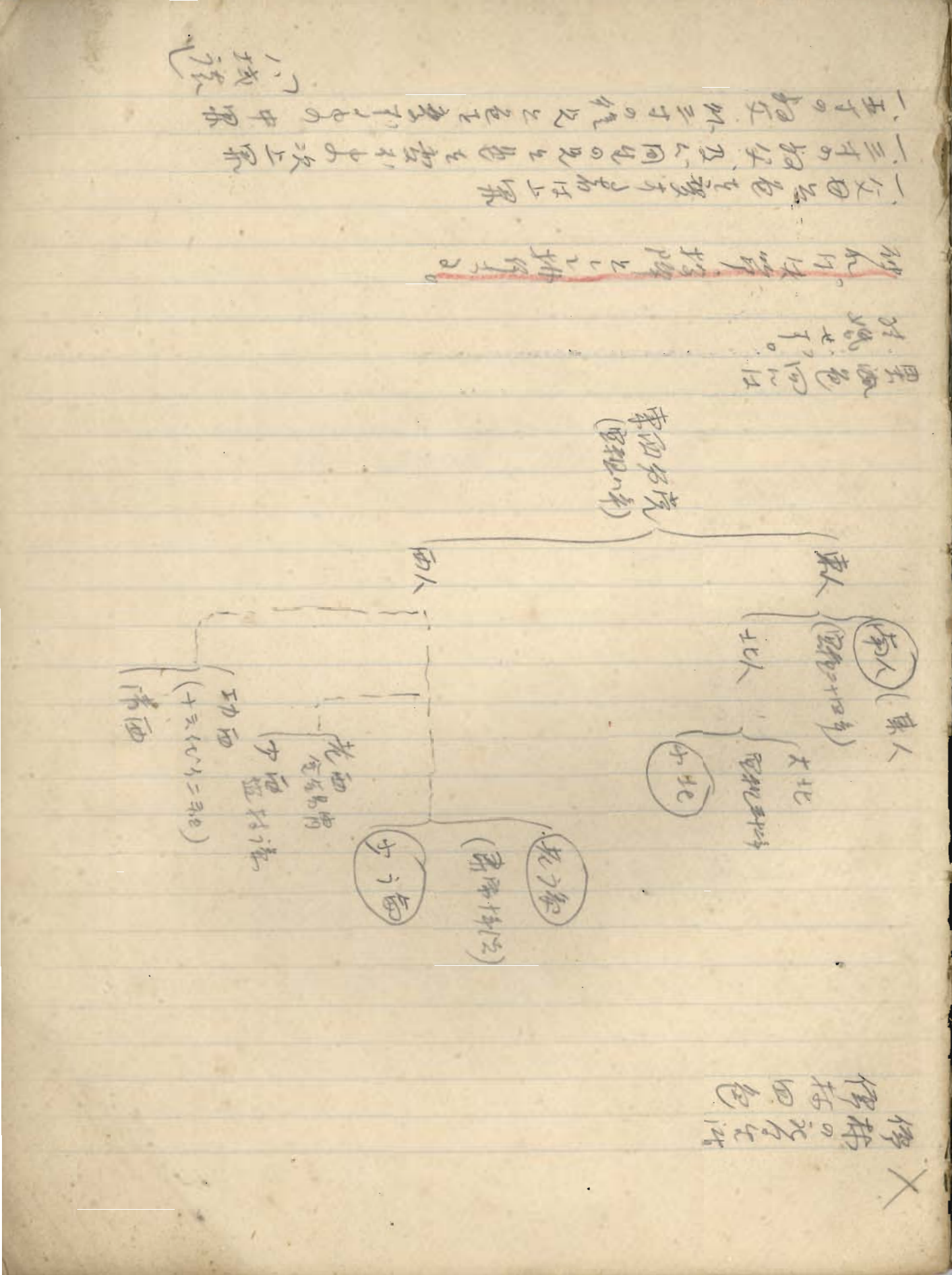
四男は新しは四男すれば。妻帯で夫婦で下女下男の場合が多い。下男は下人（ハイン）

下女はハーニョとよむ。
下女下男の住む屋をハンナングチエとよむ。ハンナングとは
大抵大門の横にある。食物は主家から主人が与へる。
主人の家から別に附近に家をもたしてあるハンナングがある。
毎日主家に来る。外他を分へ来場合もある。
主人の家で食事はとる場合多い。
雇はれた女として
つかへる。子供も主人の子と遊ぶ。
ハンナングは皆は世話的に主家につかへた。常民の一般
である。
普通の部落には地主は居ない。居るのは屠殺を仕事な
邑主等にのみある。
邑と邑は同じ。部落には邑は唯一つ。皆は叮場は部
落の花地又は部落にあった。部落も邑の外、皆ちさな
市は部落部落にもある。叮場として発達したのは
邑の外。邑には市場の設置がある。邑には必ず市
場はある。
雇用人――下女の一種、大抵一人名、ハーニョの一種
女子
雇ふには村の年のあまった人が頼まれる。家に限ったことは
ない。対等の関係である。書家勤めの契約をする。
ある、二三日あんやり場合もある。

祭示的と宗教的
—儒教的　宗教的　道教的
—仏典
—他の祭り

一年二回説
十五日満月に行す
集する。
行家の宗族的と
村落的。

年中行事
大正月、小正月
大正月ハ儒教的　、宗教的ではない
小正月ハ巫俗的　内地の正月とよく似ている。
神木をたてる。内地のモチ花。
竜遊び、地神踏、
年占、内地ではイロリ、朝鮮では井戸
綱引の十五日も女が主、　綱引（フムミ）
綱引、男、老人中心、
部落祭と宗祭の関係。
ドンド
月の家焼き。　青年の娯楽です。
共食の行事。
四月八日
灌仏　西洋式


東人
東人
十七人
十七
十七
光仁
光仁
十二
十二
東人
東人
十七
十七
光仁
光仁
十二
十二
東人
東人
十七
十七
光仁
光仁
十二
十二

諸道の各地方

X

両班多く出でし。

四色の党人と呼ばれる人は使はず。

黄海道、平安道、咸鏡道は両班少く、四色は他の五道に多し。

慶尚道の儒林は柳成龍に存す。南人、李退溪の流れ

忠清道　少論 — 尼城（尼山）を中心に住む。

老論 — 大田附近（懐徳）を中心、李朝宋時烈が有力

江原道
京畿道　）老少南

全羅道　老論

郷校、文廟、書院、

成均館（中央）一 四学

（地方）一 郷校、書院　十三万　八七万

約十年前に於て特に養士館成均館のみ、

（郷校没落の時）

宣学士

高橋亨「朝鮮教育略史」

「八域誌」

小田省吾「朝鮮史講座　分類史」

朝鮮総督府「朝鮮の郷約」

文献

×

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四日の子孫にも伝えが芽ハ形（この中に殻が入れ
ある）とポルを出に来る。チエーウンは五年に
なった人が取り家庭で作る。子供達はチエーウン
を煮めと中の種をとって チエーウンは三の砂で（人家か
うはずれた形なと二ヶ）ほうしてすてる。ポルは食べる。
又チエーウンの話いし買ってくる。

チエーウン

武田十五日の早朝

十四日の子孫ポルいとる。

これを絞りしてポルいとる。

朝鮮の豆搾り

ここでは豆ではなく、クルミ、栗、松の実の生てする。旧五月
十四の夜に子供等が、これ等の実の殻をはいで、外に
なげすてる。その時「トーウイを持ってゆけ」とる。トーウイと
は異物あたらの意である。
比較すの事はポルいとる。

（とデキモノ（異物））

ナムルには二種類。春の芽、山菜はプンナムルとゐる
ヨモギ、メ、ネンイ、チンゲンイ、セリ、
他の一種は干したもの。なへもの、それはナムルとゐる。
大豆のモヤシはコンナムルとゐる。（新鮮のモヤシは大豆と緑豆とまぜる）（緑豆のモヤシは城船ナムルとゐる）シラケ（蕨の為）
（切干大根もナムルの一種）

新鮮のわらび
十四日の夜に（夕食に）雑穀飯（チョゴクパブ）を食ふ。一家中で食ふ。何かの厄祓いである。
雑穀飯には米の外に雑穀と云のつくるものは皆入れる。粟、大豆、きび、緑豆、やま豆、（麦は余り入れない）米をのれる。お菓子には山菜のもちたけを入れる。九種（かず十二種）米を入れる。この菓のみを　とゐる。
山菜には干かぼちゃ、大根の葉の干したもの、わらび、トラゲ、大根、モヤシ、その他を入れる。おまるは雑穀が多く米はこうとゐる。高麗人参又は十全飯。

節供には次の如き日の何かの行事がある。

一月一日
二月二日
三月三日
四月四日
五月五日　端午
六月六日　流頭
七月七日　七夕
八月八日
九月九日

四名節、正朝（一月一日）
寒食（三月の清明の次の日）
秋夕（八月十五日）

節供の十四十五日の行事
ポルム[illegible]

一月　二　三　四　五　六　七　八　九　十　十一　十二

百中
秋夕

○ コチョウ、

コンクルとプクンと蒙古の攪派

タンパイ

タンパイは今迄の意味で同じんなっている。旧式で物数の内にタンパイをとる。漢代からあるとのこと。金で用る人も出て接吻する。タンパイの数量は決まっていないもので同じです。

用る所合の物数(病気や死亡などなる)の式の下に牌(パイ)所ナ@十戸数のあります。(弱十戸)

のプクンの物時費人件費小地り公費と転費い混用。殺人の投資量。此費とは今へ(ふ)ず。宮廷費ではなく。

此費としてはタンパイの外にあり。最近は行政式や学校でタンパイをとる。北京者の例。

文獻

康德六年清朝口務廳勝務部編「攪派調查報告書」

姜生永助

○朝鮮人口問題 ×　　1331万3417人

明治43年末　1331万017人

昭和8年末　2079万1431万21人

朝鮮人略史　2020万5451万91人

男 (1058万1451万41人　103.6人

女 (1020万9千7百80人　100

現在增加率 可信地 推計人口

大正13年 — 昭和8年

年均一割年 人口增加率

0.015070534

十年后　24147819

二十年后　28046354

三十年后　32573965

四十年后　37832.838

五十年后　43940504人

補足

1. 家禮解見

李祖朝의 文臣 金長生(号沙溪) 의編。

後 光栄已 刊行

喪禮備要

沙溪 金長生의 師 中庸 의 編

仁祖 26年 刊行

四禮便覽

肅宗朝의 文臣 李縡(号陶庵) 의編纂

十年 刊行

私淑 — 著書

宋代 朱子 著訓 新文化 建設

一般 普

[illegible]

王國維 墨行本
殆鮮出版之考